

## はじめてのナント

代表理事 本間 疊

人はそれぞれに忘れ得ぬ旅がある。

一日遅れて大韓航空でソウル経由パリ行きの飛行機に乗った。パリで既に到着している17名のメンバーと落ち合うことになっている。シャルル・ド・ゴール空港の冬ざれの丘陵地帯を定刻通り着陸した。リムジンバスで夕暮れのパリの街に入る。胸がときめく。オペラ・ガルニエからほど近いオスマン通りに面したオテル・アンバサダールにチェックイン。新潟・フランス協会のメンバーと近くのカフェで夕食を共にして明日からの目的を語り合った。初めてナントに旅立つせいか自分自身が少し昂ぶっているようだ。

モンパルナス駅からTGV(新幹線)に乗り2時間余、ナント駅のホームに、私たちと同様に誕生したばかりのアトランティック・ジャポン協会のユウコ・ル・ジムナ(元)会長が満面の笑顔で出迎えてくれた。設立してまだ1年しか経ていない私たちには大きな冒険だったのかもしれない。故松崎文則初代会長の熱意とお人柄で18名のメンバーが参加したことがすべての始まりだった。新潟市とナント市は共通点が多いということもさることながら、仲良くお付き合いできるのかどうか、まるでお見合いをする気分だった。ナントでは多くの人々と出会うことができた。カタコトの英語をゆるしてもらい、拙い会話の中でパリの都会のリズムとは違う地方都市なら



ではの優しさと穏やかさを感じることができた。ユウコ会長のアイディアで2~3人のグループに分かれフランス人会員の家に招かれた。フランスの家庭料理とワインをご馳走して頂き、夜が更けることも忘れ豊かに時間が過ぎていった。このホームビギットがとても楽しく、お互いが何となく分かり合える感じでお見合いは成功したような気がした。翌日、ナント商工会議所の交流会で一人の若者がボランティア通訳として参加してくれた。ナント大学の学生で難しい会話を分かりやすく通訳をしてもらつた。聞いてみると新潟市内の高校に1年間留学したことがあると知り「世界は狭い」と痛感。忘れられない出会いとなった。オリビエ・ドルーアンさん。その後日本企業の仕事に携わり、ナントに帰りアトランティック・ジャポン協会で新潟との交流に尽くしてくれた。会長も長く務めて頂き、協会同士、新潟市とナント市の交流がやがて姉妹都市締結に及び感謝してしません。因みに夫人は同じ高校で彼と同期だった香織さん。もちろんフランス語は堪能でフランス人に日本語を教え、歴代の新潟市長の通訳もして頂いた。お二人の新潟人がナントにいてくれる心強さを大切にしたい。初めて訪れたナント市庁舎は歴史を感じさせる荘厳な建物で映画の舞台にいるようだった。そんな中でナント市主催の公式歓迎会が開かれた。当時の長谷川義明新潟市長夫人で会員の今は亡き長谷川桂子さんが市長のメッセージを読み上げられた。会場に集まつたナントの人々と、私たち18名のメンバーの思いが一つに重なつ瞬間であった。忘れられない魂のスピーチだった。直後の4月、ナント市のパトリック・マルシャル第一助役とナント大学ミン教授が義理堅く新潟を訪問され相互の本格的な交流が始まった。そして連綿と今へと繋がっていく。

1992年2月。はじめてのナントの旅はちょうど30年前のことである。

## 記憶に残る旅「ジュネーブ アリアナ美術館1991」

株式会社 日本旅行 新潟支店

この度、私新潟支店長を退任いたしました。在任中の9年間、新潟・フランス協会の皆様には大変お世話になりましたが、どうございました。後任は、前長岡支店長の番場太吉です。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

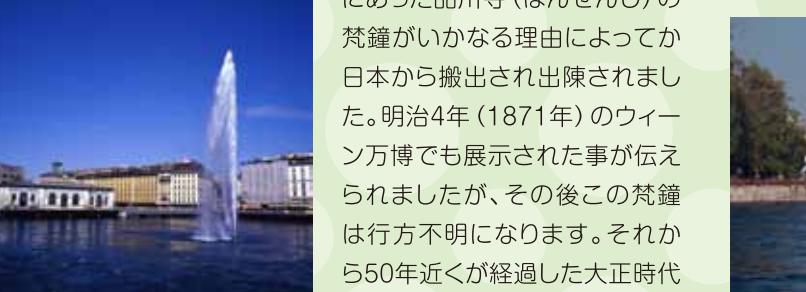
私は、日本旅行に入社してから35年以上この会社に勤務しております。先日過去のパスポートの出入国印を数えましたら、ここまで75回渡航をしていました。この数が多いか少ないかというと、35年を超える社歴からみると決して多くはないです。プロ添といわれる添乗専門のスタッフは、年200日以上海外にいるスタッフもいますが、支店勤務社員であればこの程度かもと少ないくらいです。渡航75回中、添乗・出張等の仕事が8割、プライベート・遊びが2割くらいの割合です。

海外では仕事・遊びそれぞれいろいろな思い出がありますが、特に今でも鮮明に印象に残っている仕事をひとつ紹介させていただきます。

時は1991年。私がまだ20代の頃です。当時、私は東京の支店に勤務しておりました。この年9月に東京都品川区とスイス国ジュネーブ市が友好都市締結を結ぶため、品川区から多くの市民・文化団体・行政の方々が渡航いたしました。私が、その事業の一部を担当し、お手伝いをさせていただきました。

この締結に至る経緯は、150年以上前に遡ります。江戸末期、慶応3年(1867年)のパリ万国博覧会に当時の品川宿(現在の青物横丁)

にあつた品川寺(ほんせんじ)の梵鐘がいかなる理由によってか日本から搬出され出陳されました。明治4年(1871年)のウィーン万博でも展示された事が伝えられましたが、その後この梵鐘は行方不明になります。それから50年近くが経過した大正時代



## フランス人が研究するSaké

新潟大学准教授 寺 尾 仁

フランスでも日本酒がブームです。日本からフランスへの清酒の輸出は2020年には2億円強、10年間で2.4倍を越えました。パリで開催される日本酒見本市「サロン・デュ・サケ」はコロナ禍前の2019年には3日間で5,000人を超える入場者を集めています。さらに地中海沿岸のカマルグと南東部の山間地ペリュサンでは酒の醸造もしています。

フランスの大学では日本酒の研究も進んでいます。ここで紹介するのは、若手地理学者のニコラ・ボーメールさんが書いた、そのものすばりの題名『Le Saké(酒)』と言う本です。著者は「日本に独特なもの」という副題を付けています。酒の何が独特だと考えているのでしょうか。

実は私は新潟・フランス協会会員を含む6名の友人といっしょにこの日本の日本語を作っている最中です。春に出版されるので、今年の花見の席にぜひ持参してください。

部となることで国民生活に深く根差した飲物であること、ワインは料理に合わせて選ばれるのに対して酒は酒に合わせて肴を選ぶなどを挙げています。そして、いったん人気が落ちた酒の最近の復活を支えているのは、ワイン文化に親しあんだ人たちだと指摘しています。

この本は、日本とフランスでそれぞれ相手国の文化に関する優れた学術研究成果に対して贈られる賞「渋沢・クローデル賞」を2011年に受賞しています。

実は私は新潟・フランス協会会員を含む6名の友人といっしょにこの日本の日本語を作っている最中です。春に出版されるので、今年の花見の席にぜひ持参してください。

※ニコラ・ボーメール『酒 日本に独特なもの』晃洋書房、2022年4月刊行予定



©Presses universitaires François-Rabelais

## 何気ない日常の暮らしのなかで

帽子デザイナー 関澤 正子

季節は、雪降る美しい新潟から花咲く美しい新潟へと移りました。春がやってきました。いましばらく旅行はお預けのようですが、何気ない日常のなかでも、視点を少し変えるだけで、旅行気分が楽しめ新しい発見があります。車から徒歩に変える、いつもとは違う道を行く。美術館に行く。喫茶店に行く。思いついたら直ぐに実行できる細やかなことで、いつもと違う風景に出会います。また、それはいつもと違う自分に出会えるという楽しみです。

楽しみ方の秘訣の一つとして、変身をして出掛けるのです。少し派手かしらと躊躇していたセーターを着たり、大振りなアクセサリーを着けたり、お化粧をしっかりしてみましょう。そして、変身の仕上げは帽子です。

帽子は、なりたい自分に変身できる便利なアイテムなのです。

大きなブリム(つば)のキャプリースで、散



歩に出かけましょう。小粋なベレーで、美術館を満喫しましょう。上質なトークで、エレガントにティータイムを楽しみましょう。イギリス紳士を見習って、帽子とステッキで気取ってみてはいかがでしょう。見慣れたはずの風景が、初めて訪れた街に感じるかもしれません。おしゃれは自分だけの楽しみでなく、周りの方にとっても嬉しいことなのです。素敵な人を見かけて、心ときめいた想いは誰しもお持ちではないでしょうか。何気ない日常を、少し勇気をだして変身をして、もう一人の自分を楽しみましょう。

新潟は、新潟美人の街。そして、新潟の風景にはとても帽子が似合います。色とりどりの帽子が美しく調和し、軽やかなリズムが生じ、新潟は帽子美人の街になります。あなたの帽子姿があなたの楽しみだけでなく、見知らぬ誰かの楽しみにもなるかもしれません。ワクワクしてしませんか。



エスプレッソを飲む。世界の大都市でありながら、どこか、余裕のある優雅さが、そこには漂う。仕事の日でも、ランチにはワインを一杯飲む。そこには、教養と色気、そして、フランス人としての誇りと自信を感じさせる。語り合う学生たち、手を取り合う恋人たち、立ち寄るビジネスマン、居座るアーティスト。カフェに行けば、フランスが見える。カフェにいれば、フランスが聞こえる。

デビュー10周年スペシャルコンサート ~Dream of Love~  
いまいあいソプラノリサイタル

5.28土  
14:00~  
(開場13:30)

りで絵を描いていたと話すと、「ぜひ私の居る美術会の公募展に出品して。」トントンと話が進んだ。新芸術協会という名は知らなかったが、いただいてきた図録の沿革、第0回と第2回の銀賞に義父の名を見つけ、これには本当に驚いた。アマチュア画家だった義父が生前「新潟に新しい風を吹かせるぞ」と有志と新潟支部を立ち上げた、その美術会だったのだ。

生まれて初めて百号のキャンバスに向かい描いた作品は新人賞を頂いた。そして2021年度は文部科学大臣賞を頂くことが出来た。病気の妹を見舞うこともできない昨今、妹に贈りたいと思い描いた花々。11月、コロナ禍がいつときち着いた時期に、東京都美術館での展覧会で妹に観てもらうこともできた。例年のような授賞式もレセプションもなかったが、この受賞は、きっとこの先ずっと、私の暮らしを彩ってくれるだろう。

## 石田 克弥

クな仕事に携われた事で、式典の時に感動で涙した事を思い出します。今もジュネーブ市のアリアナ美術館の庭にはこの時に寄贈した新梵鐘が展示されています。あまり日本人が観光で訪れる美術館ではありませんが、素敵



1991年、大梵鐘帰還後、60周年を記念し、新たな新梵鐘を作り、アリアナ美術館へ寄贈し、それを契機に品川区とジュネーブ市が友好都市締結を交わしたのです。

当時、まだ若く今よりも格段に感受性が強かった私は、この梵鐘の歴史と時代を超えたダイナミックな美術館です。ヨーロッパへ行く機会がございましたら、ぜひ足をお運び下さい。

この梵鐘にまつわる話の概要は上記の通りですが、もっと深く知りたい方は私までお声かけください。更に掘り下げた説明をさせていただきます。

この逸話以外にも私が体験した多くのエピソードがあります。またの機会にご披露出来ましたら幸いです。まずは、一日も早く、皆が安心して海外渡航出来る日々に戻ることを祈念いたします。

## Mに贈る野の花

新潟・フランス協会理事 白井 ゆみ

10年ほど前の一年間、娘の住むフランスに滞在した。孫たちのお守りの毎日だが、夕方までの自由な時間、何か学んで帰国したいと考え、昔々志した絵を思い出した。カルチャースクールで数か月学んだあと帰国予定を延ばし、高校時代憧っていたパリの国立美術学校の夏期講習を受講した。100時間、裸婦だけを描くコースだ。青春時代に戻ったような充実した毎日。校舎に向かうセーヌ川の芸術橋の上で、私は還暦の日を迎えたのだった。

新潟に戻り、久しぶりの新潟・フランス協会の例会で、ナントでの新潟市一ナント市姉妹協定セレモニーでお会いした会員の大森さんに「あなた、あの後フランスで何してたの?」と問われ、バ

